

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

〔学生懸賞論文発表〕 選評

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-07-24 キーワード: 作成者: 國學院雑誌編集委員会 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001754

学生懸賞論文発表

選評

第一部門（本学文学部・神道文化学部・別科在籍者）

入選 寺尾 創佑（文学部中国文学科四年）

『論語集注』における「曾子」

第二部門（本学大学院文学研究科・専攻科在籍者）

佳作 中山 さら（文学研究科博士課程後期二年）

出雲国造神賀詞奏上儀礼―負幸物と献物―

（『本誌第一二四巻第七号掲載』）

佳作 鳴海 あかり（文学研究科博士課程後期二年）

いわゆる「丑の刻参り」の完成

― 妬婦・藁人形・呪釘 ―

（『本誌第一二五巻第三号掲載』）

（所属・学年は、応募または掲載当時）

寺尾 創佑（文学部中国文学科四年）令和五年度）

『論語集注』における「曾子」

本論文は、『論語』に見える曾子に注目して、朱熹がどのうに従来の評価を改めていったかを考察した論考である。朱熹の学問は近世の東アジアで受容され、江戸時代の日本にも大きな影響を与えた。

本論文は三章から構成される。第一章では朱熹以前に曾子がどのように理解されてきたかを整理。第二章では『論語』解釈における朱熹の曾子評価を考察。第三章では、同じ孔子の弟子である子貢と曾子と比較。これら三章の考察を経て、朱熹がいかに曾子の学問姿勢を高く評価したかということ明らかにした。曾子の学問に努める姿勢が目されたのである。

本論文は、朱熹の曾子評価を二つの比較によって浮き彫りにする。一つは時間軸による比較である。曾子は漢代唐代には孝子として知られていた。この時期、父母に対する「孝」は非常に重視される評価基準であり、曾子は孝の実践者として見ら

れていた。一方で曾子の学問姿勢についてはそれほど特別視されることはなかった。漢唐の解釈と朱熹の解釈を比較することで、朱熹がいかに曾子の学問姿勢を評価したかということを示す。

いま一つは同じ孔子の門人子貢との比較である。子貢は曾子と同じように苦勞して学問に努めた弟子であり、孔子の評価も高い。しかし朱熹は子貢がわずかに天理の理解には至らなかったとする。このわずかな違いに、朱熹の子貢曾子評価が反映されていることを指摘する。子貢との比較を通して、朱熹による曾子の位置づけをより明確にした。以上の比較検討により朱熹の『論語』解釈では、曾子は学問に努める者の道しるべとして位置づけられていると結論する。

曾子評価という観点は先行研究でも採りあげられてきたものであるが、本論文は重要と思われる朱熹の言葉を部分的にとりあげ、断片的に論じたものではない。漢唐時代の解釈との比較、門人同士の比較という二つの視座により、総合的に朱熹の曾子評価を整理検討したことに特徴がある。特に子貢との比較という視座は、解説や語彙の定義などでいまま少し丁寧に論ずべきところが見受けられるとはいえず、新たな視点を提示しており、今後の発展が望めるテーマである。学生懸賞論文として十分に評価に値する論考である。